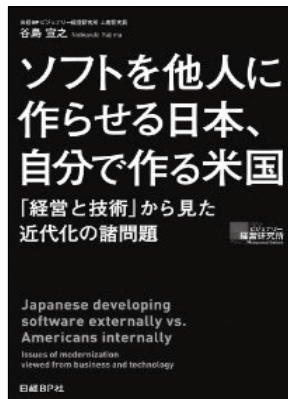


30年にわたる IT 記者の経験から思うこと



ソフトを他人に作らせる日本、自分で作る米国

谷島 宣之 著

ISBN: 978-4-8222-7378-1

日経 BP 社刊

四六判・412 頁

定価 1,500 円 (税別)

2013 年 12 月刊

最近フェイスブックで情報を入力することが多いが、この本もそうである。書籍情報注文サイトを見て翌日には自宅に配達されている。この本は、大学卒業後 30 年近くも IT の技術動向、ベンダー、ユーザーの技術者、経営者と接してきた谷島氏にしか書けないトピックスが満載である。まずは書評者が一読した後に読者に目を通していただきたいと思ったものを以下に目次の章番号で列記する。もちろんこれは書評者の思いであり、皆さんにはどこから読んでもらってもさしつかえはない。この本は何回も読み直したくなるものである。

目次は 2 段落なので、その章の何番目のトピックスかを示し、特定のトピックスにジャンプできるように 3 段落にて紹介している。

- 1-5-3: Collaborative は「協調性」ではない
- 2-1-2: 手段に集中、目的を忘れる
- 2-6: あえて労働集約
- 2-6-2: 隣の事に気がまわらず
- 3-1-1: 普通の日本語で考えよう
- 3-3-1: 我々は情報責任を果たしているか
- 3-4: 数値目標の暴走をどう防ぐか
- 4-4: 「システム内製」こそ理想の姿
- 4-5: “技術の暴走”に社長が備えておくこと

谷島氏も述べておられるが、あるトピックスに目が行った場合、関係する参考文献を読みたくなる。この本にはそれが多くしめされており、より深く背景等勉強をする場合にも有効であろう。

(新谷勝利)

『対話という学びのコミュニケーション方法』

ソフトウェア開発を取り巻く環境は大きく変化している。ビジネス、自社やアライアンス含む組織、個人の仕事や生活など、環境は絶えず変化している。ソフトウェア開発に必要な知識を学び、スキルをつけること、そして組織活動の方向性やノウハウを共有し徹底することは難しくなっている。

本書は、学びや組織としての考えや知識の共有には、対話（ダイアログ）が有効であると説く。これまでは知識や思いを一方向的に説明すること、〇〇ウェイとしてスローガンを掲げることやストーリーテリングで伝える方法も行われてきた。しかしお客様の求めるものが多様化するだけでなく、組織のメンバーの価値観も多様化しており、これまでの情報伝達方法では期待する成果が得られないことが多くなっている。

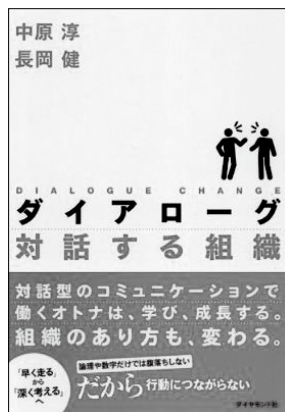
こんな時代には価値観や立場の違いを前提として、リラックスした環境での対話が有効である。雑

談でも議論でもない対話である。

この対話の方法は簡単そうで、なかなか難しい。リラックスした環境で、互いの違いを理解しつつ、話をしなければならない。特に日本人は自分のことについて、照れずに説明し主張することが苦手である。しかし、対話を通じた組織活性化については、日本企業の事例が多く紹介されている。ソフトウェア開発のプロセス改善において、この対話という方法は非常に有効だと感じた。私がまたプロセス改善に従事することがあれば、対話を重視した改善活動をしたい。

本書の最後には対話による新たな学びとして、学びのサードプレイスについて紹介されている。近年は、技術者コミュニティや IT 勉強会が多くなっている。このようなインフォーマルでパブリックな学びの場が、これからのソフトウェア開発を高度化させてくれると期待している。

(渡辺登)

ダイアログ
対話する組織

中原 淳、長岡 健 著

ISBN: 978-4478005675

ダイヤモンド社刊

単行本・224 頁

定価 1,600 円 (税別)

2009 年 2 月刊